

令和六年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

高校生の部 最優秀賞

「漱石から受け取った信念」

光塩女子学院高等科 3年 佐伯 理奈

作品名『私の個人主義』

選んだ一行 その時確かに握った自己が主で、他は賓であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えてくれました。

「私の個人主義」は、大正三年に夏目漱石が学習院の学生たちに向けておこなった講演の記録だ。自身のさまじまなエピソードを取り入れ、丁寧な、ときには自虐も含めた漱石の講演内容は、小気味よく、生き生きしていて決して色褪せていない。まるで現代の課題を熱く論じているかのように感じたのと同時に、自分の内面と深く向き合う自己対話の重要性に気づいた。

現代社会では、SNSの「いいね!」や同調圧力によって個人の意見を述べることをためらったり、インターネット上のクチコミや評価の星の数に決定を左右されたりと自分を見失いがちだ。生成AIにコマンドを入力し、表示された回答を自分の意見だと勘違いしている人もいる。SNSやインターネットは私たちの生活を便利にし、人と人がつながることも容易にしたが、一方で閉塞感や孤独感を募らせる人も多いと聞く。それは、私たち現代人が自分が主であるという意識を持ち、自らの意思で道を切り開く「自己本位」を手放して、他者の判断に従うのが当たり前前の「他人本位」に支配されているからゆえに起きているのかもしれないと感じた。

読後、私は自己対話の機会を習慣づけ、判断や行動が自分の意志に基づいているかどうかを常に問うようになった。また、漱石が語ったなかで、ひときわ凜とした強さを帯びた矢となり私の胸に刺さったのが「自己が主で、他は賓であるという信念」である。一見、自分勝手や利己主義にも聞こえる言葉だが、その真意は自分の意志や価値観を重視すると同時に他者の意志や価値観も同等に尊重するべきという漱石からの強いメッセージだ。私は多様な個性を尊重することの重要さは最近になって言われ始めたのだと考えていた。しかし、百年以上前の漱石が若者たちに語った内容には、既に多様な社会を構築する必要性が示唆されていることにまず驚き、端的に表現された信念の凛々しさに感銘を受けた。それからの私は毎回の自己対話のなかでこの信念をリマインドしている。そうすることで変化が起きた。私は他者の意見への否定や噂話への同調、憶測での発言をすることを一切しなくなったのだ。私は「他人本位」から解放されて「自己本位」を手に入れ始めたのだろう。そして、自分を認識してこそ、他者を重んじることができると確信した。そう、多様な個性を尊重する社会をつくる第一歩は自分自身と向き合うことなのだ。

漱石は講演で若者に未来を託した。そして、百年以上の時間を経て、現代の若者である私が受け取った。「自己が主で、他は賓であるという信念」を胸に、誰もが自分らしく輝ける社会の実現のために行動していこう。そう決意した。